



中国がわかるシリーズ 38

モンゴルの勃興

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

13世紀初頭、ユーラシアの大草原では、東西から2つの太陽が昇りつつありました。1194年にセルジューク朝を滅ぼしたホラズム・シャー朝は、7代、ムハンマドが、1212年、西カラ・ハーン朝を、1215年には、ゴール朝を滅ぼし、中央アジア、イラン、アフガニスタンの地に大帝国を現出させたのです。

東のモンゴル高原では、モンゴル部キヤト氏族にテムジンというリーダーが現れ、タタール部、メルキト部、ケレイト部、ナイマン部などを次々と下して、1206年に即位、チンギス・カン(~1227)と名乗って、大モンゴル国を樹立しました。モンゴル高原が統一されたのは、ウイグル以来、実に350年ぶりのことでした。モンゴルの国制は、東方(左翼)興安嶺方面に、チンギス・カンの実弟であるカサル、カチウン、オッチギンの3名を配し(東方3王家)、西方(右翼)アルタイ山方面には、ジョチ、チャガタイ、ウゲデイ(オゴデイ)の3子を配して、それぞれに千人単位の遊牧領民集団(ウルス)を分封するものでした。なお、末子、トルイは、チンギス・カン直属の大軍団とともに、中央に置かれました。これは、遊牧民特有の末子相続制の名残です。

モンゴルの勃興を目の当たりにした中央アジア東方の諸民族は一斉にモンゴルになびきました(ウイグルは、1209年、チンギス・カンに与し、新国家の中樞の一翼を担うこととなります)。足元を固めたチンギス・カンは、1211年、大金国への侵攻を開始しました。1214年、大金国は圧力に耐え切れず、南遷して開封に移り、1215年、モンゴル軍は、首都、中都(北京)を占領しました。この戦争で、大金国の傘下にあったキタイ族はモンゴルが吸収しました。

嘗て、大帝国を築いたウイグルやキタイを取り込んだことは、国家運営の面で(モンゴルにとって)大きな収穫となりました。特に多言語に通じたウイグル人は、商業面のみならず、文化面でも多大の貢献を行うこととなります。チンギス・カンは、4駿・4狗と呼ばれた8人の僚友やイスラ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ム商人アサンに助けられ、散在する鉄山を効率的に管理運営して、強大な軍事力を涵養しました。テムジンという本名は鍛冶屋に由来すると云われていますが、チンギス・カンと鉄は切り離すことが出来ません。

ここで、カンとカアンについて整理をしておきたいと思います。北方の遊牧民の王や族長は、カン（ハン、汗）と呼ばれていました。そして多民族を統合して北方の草原地帯に君臨する皇帝のことを、カアン（可汗、後にハーンと発音）と呼んだのです。テムジンは、実態から見れば、明らかにカアンでしたが、当時は、カンと呼ばれていました。モンゴル帝国で、カアンと呼ばれるのは、2代、ウゲデイ及び4代モンケ以降のことです。